

取組実績の概要 【2ページ以内】

本補助事業は、日中韓の3大学が連携し、教育分野における世界レベルの大学院教育を通じて、東アジアそして世界で活躍できる「高度な力量を備えた学校教員、スクールリーダー、教員養成担当大学教員」を養成することを目的としてスタートした。

初年度にあたる平成28年度には、東京学芸大学・北京師範大学・ソウル教育大学校の日中韓3大学それぞれが運営組織を立ち上げ、3大学間でも月2回のペースで協議を重ね、キャンパス・アジア（以下「CA」）事業の理念、事業計画等について議論し、共通理解を積み上げるとともに、日本側においては上記の人材像の養成に資する授業科目を提供する1年間の交換留学を開始し、韓国側の実施した日中韓の拠点大学の学生が一同に会する2週間の短期研修にも参加した。

その他、教員養成分野の学生の留学を促進する環境整備や学生のグローバル化を推進するための取組、さらには海外の卓越大学との連携により徹底した国際化を目指し、日本の教員養成系大学・学部モデルを提供するために関係教職員とプログラム参加学生の共通理解のもと、積極的な取組を行った。

5年間に亘ってのこうした取組は、日中韓の教員養成を担う中核大学である3大学が、東アジア地域における教員養成の主導的な役割を果たすために有用なものであると同時に、日本の教員養成系大学・学部の一つのモデルを提供するとともに、内向きになりがちな教職志望の学生に対し、グローバルな視野や態度を涵養するための先駆的活動として展開したものである。

平成29年度には、前年度以来の各種活動に新たな活動を加えた「東アジア教員養成国際大学院プログラム（International Graduate Program for Teacher Education in East Asia：以下「IGPTE」）」のフレームを構築し、プログラムの確立に向けて学生交流プログラムに取り組んだ。CAラウンジを設け、学生交流の場を整備するとともに、短期受入れ・派遣事業や言語ラボ等、学生のグローバル化を推進する活動を新たに開始した。また海外の卓越した大学であり、CA事業においてコンソーシアムを構成する北京師範大学・ソウル教育大学校との連携事業や華東師範大学・公州大学校等、教育分野における中韓の卓越大学を含む東アジア教員養成国際コンソーシアム（International Consortium for Universities of Education in East Asia：以下「ICUE」）の事務局設置大学・日本側連絡校として、CA事業を通じて、加盟44校とのネットワークをさらに強化し、全学的な国際化を推進した。

平成30年度には、IGPTEの全体設計が概ね完成し、事業を軌道に乗せる1年となった。プログラムを構成する短期研修、長期研修（交換留学）、ダブルディグリー・プログラム（以下「DDP」）のいずれについても、学生からのニーズも強く、語学検定試験の級の取得や表彰等の目に見える成果のほか、将来設計といった学生の人生への大きな影響に至るものまで、高い教育効果が認められた。

具体的には①グローバル人材育上の懸案である語学力向上に向けて、言語ラボからスタートし、短期留学・長期留学（交換留学）へとつながる事例が散見され、特に短期留学に関して夏の韓国へのプログラムの参加者が45名にも上る等、大きな成果があった。②東京で開催された第13回ICUEシンポジウムにおいて、日中韓3大学の大学院生・若手研究者がポスター発表を行い、若者同士の交流を深化し、次世代コミュニティの形成を促す有意義な機会となった。

令和元（平成31）年度は、プログラムの運営・改良と並行して、スタートしたDDPの運営に重点的に取り組むことによりプログラムが大きく進展する1年となった。

当プログラムにおける教育・交流活動は、学生の多様性やニーズをふまえて毎年改良を加えてきたが、当該年度は特に3国の学校教育や教育環境等に関する議論・理解を深めるなど、より成熟度の高い成果を残すことができた。同時に、プログラムの持続性をみすえた活動形態・内容並びに教職員の役割分担・協力体制等に関する検討を行い、改善を行った。具体的には①中国西安市の陝西師範大学で開催された第14回ICUEシンポジウムにおいて、日中韓の大学院生・若手研究者が発表を行い、さらなる交流の深化と次世代コミュニティ形成の促進につながる機会となった。②経験豊富な教員が韓国語・中国語のきめ細やかな指導を行う言語ラボをはじめ、プログラムで準備された実践的な学習・交流体験、学校現場での参観を含む短期留学というステップを経て長期留学に臨む学生が着実に増加し、学習・教育経験の連続性と深化がみられた。③養成する人材像に係る力量を育むための、学生の学校段階、所属・専門等に応じたきめ細や

かなプログラムを提供することにより、成績・研修レポート及びアンケートによる効果測定から、プログラムへの参加による語学力伸長等の学習効果や学生の高い満足度や意識の向上が確認できた。

事業最終年度となる令和2年度には、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、交換留学による学生の受入れ・派遣が中止となったため、受入れに関しては前年度受入れ学生が帰国後の秋学期は、オンラインによる授業のみの実施となった。派遣については、言語ラボの実施による留学に向けた取組を継続するとともに、春学期にプログラム関連科目（以下「CA科目」）の開設も継続し、留学がかなわなかった学生に対してオンラインでの授業を提供した。また、短期留学（受入れ・派遣）も渡航を伴うプログラムの実施はできなかったが、ソウル教育大学校と連携し、オンラインによるプログラムの提供を行った。このようにICT機器やオンラインプラットフォームを最大限活用することにより、実質的な交流活動を継続することができた。

また本プログラムによって構築した大きな成果であるDDPにおいては、9月に北京師範大学へ1名、ソウル教育大学校へ2名の大学院生（修士課程）が正規学生として入学し、ソウル教育大学校入学の1名は、感染対策を徹底のうえ3月から渡航を伴う留学を開始した。北京師範大学入学の1名は、北京師範大学の指導教員による遠隔指導のもと、オンラインにより学修を進めている。ソウル教育大学校入学のもう1名も、令和3年9月渡航を目指し、学修を進めている。

これらの取組の補助事業終了後においても、日中韓3大学におけるDDPは、本学における学位プログラムの目玉となる取組として定着し、また引き続き開設しているCA科目を含む「キャンパス・アジア修了証プログラム」を新たにスタートさせ、質保証を伴う取組を自走化させている。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

（単位：人）

	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		合計			
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入		
計画※	6	6	16	16	18	18	28	18	28	18	96	76		
実績	実際に渡航した学生 （以下「実渡航」）		5	14	30	42	87	50	58	44	1	0	181	150
	自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講した学生 （以下「オンライン」）								0	0	11	6	11	6
	実渡航とオンライン受講を行った学生 （以下「ハイブリッド」）								1	0	0	0	1	0

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】**★キャンパス・アジア推進に貢献する授業科目の開設等**

東京学芸大学（以下「本学」）ではキャンパス・アジア（以下「CA」）事業での受入れ学生に対し、留学生科目「日本の教育と文化」や「東アジア教師論演習」などを通じて、人材像育成と学生間の交流の促進に努めている。また日本人学生の派遣留学への意欲の醸成のために、平成29年度から学部正規科目にCA科目として「学芸フロンティア科目B」（留学のすすめ）を開設し、留学の意義や計画の立て方等を学ぶ機会を提供している。これらは、プログラムの必修科目に設定している。

さらに、本学、北京師範大学及びソウル教育大学校の3大学（以下「3大学」）において、それぞれCA指定科目を開設し、プログラムに参加する大学院生に受講を求めている。

★ダブルディグリー・プログラム

ダブルディグリー・プログラム（以下「DDP」）は3大学において慎重に設計してきたもので、平成30年度から満を持してスタートさせることができ、平成31（令和元）年度には北京師範大学からの2名の修士課程の大学院生を受け入れることができた。彼らは、令和3年9月末に本学修了見込である。派遣では、令和2年度には北京師範大学へ1名、ソウル教育大学校へ2名の修士課程の大学院生が、DDPに基づきそれぞれ入学を許可され、派遣することになった（ただし、新型コロナウイルス感染症の影響で、北京師範大学の1名、ソウル教育大学校の1名は留学を開始できておらず、令和3年秋に向けて渡航準備中である）。

★東アジア教員養成国際コンソーシアム（以下「ICUE」）シンポジウム

ICUEで培われた大学間のネットワークは、44大学から47大学に加盟大学も増えるとともに、年1回シンポジウムを開催することにより、学会における大学院生の研究発表の機会を提供するほか、大学院生の専門性に応じた指導教員の選定と高度な研究指導、半年・1年の長期交換留学を促すことにつながった。

★交換教員による研究発表会

平成30年度10月から令和2年3月にかけて、北京師範大学からの交換教員を2名受入れた。当該教員は、受入れ・派遣学生のサポートや言語ラボの担当等プログラムの運営に携わった他、研究発表会も実施した。これにより多くの日本人学生が日本に居ながらにして、海外の研究実践に触れる機会をえることができた。

★キャンパス・アジア公式サイト

本学では、CA事業専用のウェブサーバーを整備し、プログラムの公式サイトを開設し、広く情報発信を行っている。特に、プログラムに参加している派遣学生から毎週、北京とソウルより寄せられる留学生便りを掲載し、滞在中の取組や生活状況等の有益な情報を発信している。その他、本事業の多種多様な活動の数々を定期的にウェブ上で発信しており、コンテンツの充実ぶりは特筆に値する。

★コロナ禍におけるオンライン活用の取組

2020年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響で、実渡航を伴う交流のほとんどを実施することができなかったが、ZOOM等のミーティングツールやICTの活用により、オンラインによるCA科目を開設することができ、北京師範大学他の留学生が参加し、実施することができた。さらにオンラインによる特別講義及びシンポジウムを開催し、多くの学生が渡航せずとも、連携大学によりコロナ禍における様々な実践に触れる機会を得る等、実質的な交流を継続することができた。

以上のような取組が、今後の教員養成系大学・学部の教育活動の参考になるものと期待している。